



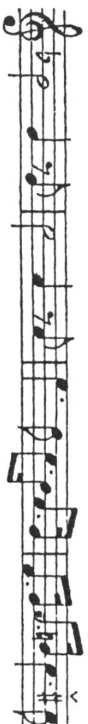
同科 第二回

大正十五年度



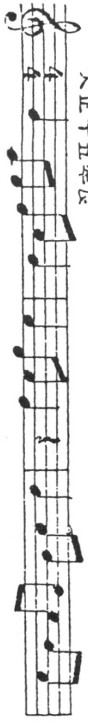
臨時教員養成所

大正十五年度



乙種師範科

大正十五年度



小學唱歌

甲種師範科 (第三編、頭の雪)

臨教 (第三編、招魂祭)

乙種師範科 (初編、富士の雪)

コンコーネ (第十二番)

〔横組〕

〔樂星〕第三卷第二号 昭和二年二月 一一四〜二〇頁

(二) 関連資料

東京音楽学校の豫科へ入学し度いのですが入学資格と試験の有無及若し試験があるとしたらと受験科目はどんなものですかを教へて下さい (本所同女)

入学試験があります、高等女学校二年修了程度にて國語、日本歴史、日本地理、算術、英語、普通樂譜(大要)、唱歌の七科目の試験をされます、但し高等女学校二年級を修了したる者は右の内國語歴史地理算術の試験はありません

〔都新聞〕大正三年一月十八日

東京音楽学校生徒募集 本年四月同校に入学せしむべき生徒を募集要領は大正六年十二月二十四日官報にて發表せられたり、左の如し。

入學願書受理期間 三月一日より同月九日まで

受験者資格

豫科 中學校又は高等學校第二學年を修了したるもの若しくは之と同等以上の學力ある者。但し中學校高等女學校第二學年在學中のものと雖も當該學校長に於て本校入學期以前に修了の見込ありと認めたるものは修了者に進ず

甲種師範科 年齢滿十六歳以上にして師範學校中學校又は修業年限四ヶ年以上の高等女學校の本科を卒業し當該學校長の薦學を受けたるもの若しくは之と同等以上學力あるもの。但し師範學校中學校高等女學校在學中のものと雖も當該學校長に於て本校入學期以前に卒業の見込ありと認めたるものは卒業者に進ず。

乙種師範科 高等小學校卒業のもの若しくは之と同等以上の學力あるもの。

入學試験科目

豫科

國語、日本歴史、日本地理、算術、英語 以上は中學校高等女學校第二學年修了程度

普通樂譜大要 譜表・音部記號・音名・音符・休止符・音程・拍子・音階・臨時記號・雜記號・移調併に簡易なる樂語につき筆答せしむ。

唱歌 文部省發行小學唱歌集の程度にして其方法の概要左の如し

イ 聽音 簡易なる旋律を與へて之を筆答せしむ。 口音階 長旋法

ハ 音程 五度音程まで 二歌曲 小學唱歌集中より一問題と別に新曲一題を課す。

但し必要と認むる場合には器樂の試験を行ふ中學校第二學年を修了したるものは唱歌及び普通樂譜、高等女學校第二學年を修了したる者は唱歌、普通樂譜及び英語の外試験を要せず。

甲種師範科

國語、理科、地理、歴史 以上は師範學校中學校又は修業年四箇年以上の高等學校女學校卒業の程度

唱歌、普通樂譜大要

以上は同一程度にして其方法の概要は豫科の處に記載せり參看せらるべし。

師範學校中學校高等女學校卒業者にして當該學校長の薦學を受けたる者は唱歌普通樂譜大要の外試験を要せず。

乙種師範科

國語、日本歴史及地理、算術、

唱歌、文部省發行小學唱歌集初編程度

高等小學校卒業者は唱歌の外試験を要せず。

募集人員

豫科三十人 甲種師範科約三十人

但し官費生を募集せず

乙種師範科約二十人

試験日割

豫科 三月二十七日より四月一日まで

甲種師範科 三月二十八日より四月一日まで

乙種師範科 三月三十日より四月二日まで

入學手續注意

イ、入學願書には履歷書戸籍謄本最近に在學したる學校長の證明せる學業成績並に品行證明書寫眞及び受験料金貳圓を添付すべし。

ロ、戸籍謄本は大正七年二月一日以後作成したるもの寫眞は手札形單獨半身脱帽同年一月一日以後撮影したるもの受験料は現金又は郵便小爲替（拂渡局及受取人の指定なきもの）を以て納付すべし。

ハ、甲種師範科入學志願者にして師範學校中學校又は高等女學校本科を卒業したるもの若しくは在學中のものは當該學校長の薦舉を受くべし其資格なきものは修業證明書を差出すべし。

ニ、甲種師範科に入學志望のものは選擇科目としてオルガンピアノ又はヴァイオリンの一科竝に國語及漢文又は英語の一科目を記入すべし。

ホ、豫科及び甲種師範科入學志望のものにして師範學校中學校高等女學校卒業のものは卒業證明書寫在學中のもの又は半途退學のものは當該學校長の修業證明書を差出すべし。
ヘ、官公立學校在職者其他公職にあるものにして入學試験を受けんとするものは入學願書に應募認可證を添付すべし。

ト、入學志願者は試験前日までに受験證を受取るべし地方より上京するものは試験中滞在すべき住所を定め試験前日までに届出づべし。居所を變更したるもの亦同じ。

(用紙美濃)

入學願

私儀御校某科(某部)ニ入學志願ニ付試験ノ上(無試験ニテ)御許可被成下度別紙履歷書相添へ此段相願候也

本籍地何々

現住所何々

族籍、何某男女兄弟姉妹又ハ戸主

年月日

本人何

某印

東京音樂學校長何某殿

何年何月何日生

履歷書

族籍

何某

出生地何々

何年何月何日生

父兄職業何々

何年何月何日何學校ニ入り何年何月何日卒業

(卒業證書寫別紙ノ通)

何年何月何日何某ニ就キ何々修業何年何月何日何々ノ事故ニ因

リ退學又ハ廢學何年何月何日何業ニ從事

賞罰何々

右ノ通りニ有之候也

年月日

右

何某印

〔音樂界〕第一九六号 大正七年二月 五六〇五八頁

東京音樂學校 本年産入學志願者は合計百八名にて數に於ては著しく減せしも實際に於て遙かに優秀なりと

〔音樂界〕第一九八号 大正七年四月 三七頁

音楽學校に入る人に

同 學 生

音楽學校の入學試験もすんだ、廊下の正面に張り出された一枚の紙切れが實に彼等受験者の運命を決するのだと思ふと、見に行きたくもあり又何となく恐ろしい様な氣もする事だらう。

首尾よく及第した者は無上の快感を以て咲き誇る上野の花と其得意さを競ふのであるが不幸失脚した人達は彼の麗はしい公園の春色も落寞たる秋の野原の様に見える事だらう餘念なく遊び居る人戯れて居る人々も、彼の眼からは思ひやりのない無情な人の様に見える事だらう。

然かしそれもこれも過去の事、今後益一層の努力を以て當初の目的を貫徹するより外に途はない、失敗は成功の母である、俗に七轉び八起きとすらいふ事がある位で、一度や二度の失脚に落膽する様な事では人間萬事何一つ出来る者でない。

一朝世の中に出たならば、こんな試験所でなくモットモット恐ろしい場合に臨(ん)で自己の運命を決しなければならぬ場合が澤山にあるのだから、これに比べたら學校の入學試験などは鼻唄で景色の好い野道を歩く様な者だ、恐ろしくもなければ苦しくもない。

ではあるが最初から鼻唄を歌ふ心持で出て來たらそれこそ飛(ん)でもない失策で、失敗立どころに來らなければならぬのだ。

然るに一生懸命でやつて來ても不幸入選の榮を荷へない人がある、夫れは如何いふ人がといふと、如何なる事を如何いふ風に勉強して居ればよいか、勉強の仕方目的も本當に解らないで、この位

出來たら大方よからうといふ考へで出て來る人々もある様だが、かゝる人々は甚だ氣の毒にたへない。

何事にも順序と方法とがある者で、一朝夫れを誤たなら如何に努力しても容易に其目的を達する事の出來ないのは如何にも同じ事だ人一倍の心配をして其結果が好ない事になる

運動會で勝ちを得るにも殆ど一定の要領がある様に、矢張斯ういふ藝術を主とする學校の試験に應ずるにも相當の要領があるのだ、夫れを知らずして徒らに勞するとも殆ど功なしといはなければなるまい。

だから入選の榮を得んとするには入學試験の一二ヶ月前から——少くとも——其要領に適ふ方法で正確に眞面目に勉強をしなければならぬのだ。現に本年なども半年も前から東京に出て、其道の専門家に就て熱心によつて居た人もあり、或は各學校の各期休業を利用して開かれた音楽講習會に出席し、更に受験前に早く上京して講習を受けて首尾よく及第した人もある。

本當に音楽に志して音楽學校に入らうといふならば、先づ此方法をとるのが一番安全であらうと思ふ。

地方から出て來て試験に應じやうといふ人達の中にも、これでは到底見込がないが、今迄どんな事をやつて居たのだらうと思はれる人もあるといふ事だ、其くせ随分熱心に勉強して居たのである様だが其方法を誤(つ)て折角の苦心も水泡に屬する者もあるのは其人の一生の爲に氣の毒の限りといはねばならない。

ほかの學科と異(つ)て音楽の如きは教師の口から直接に耳に入り、口傳へで教へて貰い直ほして貰ふのでなければ正確に稽古の出

来ない者だから、他の書いた者を讀(ん)で字引を引き、覚えてゆく事の出来る者とはそこに甚しい相違がある、語學を習ふ者が直接外國人から其發音を習はなければ本當に近い音が出されない様に音樂も亦同様の感があるから今後音樂學校に入らうといふ人はよく此邊の事を心得て居らねばならない。

以上音樂學校に入らうといふ人々の爲に所感をのべたのである、何所で勉強して居ても一點の非難がない迄に勉強の出来る人は格別のことだが、さもない人達の爲には此様な注意を與へて置くことは決して無用であるまいと思ふ。

〔月刊樂譜〕第七卷第五号 大正七年五月 二九頁〜三〇頁

官立音樂學校入學受験者に注意

女子音樂學校長 山田源一郎

官立音樂學校では毎年三月數十名の生徒を募集し、入學受験者が各地方から澤山參集應募する例になつて居るが、受験に關する準備又は注意の不足なるが爲め、折角遙々多額の費用と多大の勞力を犠牲として上京した者が、空しく不合格の憂き目に合ひ、泣く／＼歸國する者が多數あるのは、實に氣の毒の次第と言はねばならない。音樂は他の學問とは自ら性質が異つて居り、誰でも學べは必ず成功するとは言へない。勿論大體は其人の修練の力による譯ではあるが、又一つには其人の天稟に屬することは争はれぬ事實である。

左れば此道に志す者は先づ己れが果して音樂に適するや否や、又多少共音樂の素質ありや否やを充分調査せねばならぬ。

如何に自信ある者と雖も自己の能力を己れ自ら批判することは困難なることである。左れば自己の信賴する人、例へば父母又は教師等の先輩に就て篤と相談し、其人の腹藏なき意見を聴くがよいと思ふ。聊かたりとも父兄其他の不同意あらば、斷然中止した方がよい、父兄の許可なく、又先輩の不賛成なるにも拘はらず、自儘に上京するのは甚だ宜しからぬ事である。

諸父兄其他先輩の同意あらば大に準備に着手せねばならぬ。然して其方法如何と言へば、入學志望の科別によつて種々の區別がある。即ち豫科、甲種師範科、及び乙種師範科が夫である。

本年三月東京音學校生徒募集要領を參考すべし。

體格の強健なるを要するは申す迄もなく、唱歌は大體試験科目中に明記したる通りで、試験採否の方針は時の學校長の意見により、又試験委員の多數の意見により、時に多少の差はあるも、從來の經驗に徴すると、修練の如何よりは寧ろ其人の素質の如何に重きを置く様であるから、先づ其點に注意するの必要である。

可なり修練ある者でも、時に不合格となり、又素養の少ない者でも往々合格する者もあつて、人々に意外の感じを與へる事もあるし、甚しきに至つては試験委員の不公平を訴へる者さへあるのは、蓋し前述の理由に基づくのである。

又唱歌は入學試験科目中最も重要な學科目の一つで、例へば他の學科目が如何に優秀だからとて、萬一此科目に幾分なりとも缺點のある時は、先づ合格は覺束ないものと覺悟しなければならぬ。

唱歌中でも殊に新曲に注意する必要がある音階とか、小學唱歌集とか、如何に完全に出來様共、そのみでは駄目である。

大體唱歌の試験は二回に別れ、第一回では音階、小學唱歌集中の一曲、簡単な音程位を試験して、此試験に無事通過した者丈が第二回の試験を受くる資格があるのである。

第二回は第一回より多少程度の高い新問題が提出され、此試験が即ち及落の關が原となるのである。準備少き者、素養少き者は、多くは此試験で運命が定まるのである。

要するに受験者は新問題に當つて差支へぬ様に平素充分なる練習すべきで、夫れには豫め良き教師に就き、コール(ユー)ブンゲン(音程練習書) 其他類似の書物により、反復丁寧に練習するより他に良策はない。

如何なる新曲に出會つても、直ちに唱ひこなせる様に應用智識を養ふ外はない。

次に受験準備の場所の話に移るが、邊鄙の田舎に居て準備するより、都會に出て勉強するのが一番上策であるのは勿論の事である。

田舎に居ては第一良き教師に就く便宜が少なく、周囲の刺戟が少ないから、恰も鳥なき里の蝙蝠同然、向上の機會が乏しい。

都會に於ては良き教師に就く便宜も多く、刺戟も多く、確かに田舎より勉強に利益がある。左れば可成都會に出て準備することを勧告するのである。

萬一身上、又は經濟上種々の故障で都會に出る事が出來ないな

らば、是又致し方がないから、せめては夏季、又は冬季休業を利用して、少くとも其期間丈なりとも空しくせず、講習會に出席する爲め奮發して出て來ることが必要である。

斯く平素から怠らず心懸けて勉強したならば、精神一到必ず其目的を達するに疑ひない。

〔音楽界〕第二〇号 大正七年七月 三七〇三八頁

音楽學校の入學者 豫科百三十名、甲師九十六名、乙師四十五名の志願 中から、前後二回の試験を経て登第した者は、豫科に三十三名、甲師に三十名、乙師に十二名に特別入學許可者もあつて合計七十八名であつた、今年の入學者には大分番狂はせがあつて、十中八九大丈夫と目星をつけられて居た者で、投げ出された者もあつたといふが、試験は一つは運の者半ば富くちを抽く様な者と思へば間違いはあるまい、但し志望者は男子に少くして女子に多く、従て女子の競争は仲々激烈だといふ事だが、どしどし素質の好い者でなければ入れない様になる事は、寧ろ望ましい事である。

〔月刊樂譜〕第八卷第五号 大正八年五月 二六頁

音楽學校入學試験程度改正 明年より同校入學試験程度を改正し、中學四年高女本科四年終了以上とし、豫科には從來の唱歌、樂典等の外に、國語英語及び器樂を加へ、甲師には國語と器樂とを加へたり、右學則改正に準應する爲め、東京下澁谷の女子音樂園にては新たに受験科を擴張し、聲樂、器樂の外に國語と英語とを兼授する事となせりといふ、又遠來の人の爲に寄宿舎をも設け目下生徒募集

東京音樂學校入學案内

一學科 本科と師範科と二科で、本科は又聲樂部と器樂部とに、師範科は甲種と乙種とに分かれてゐる。

本科に入る者の爲め別に豫科が置いてあり、卒業後更に研究を續ける者の爲めに研究科と聽講科とを設けてある。

選科は、他の學校で修業中の者、又は業務のある者、或は家庭に居る者が餘暇に唱歌又は器樂を學ぶ爲めに讀けたものである。

修業年限と學科目 本科は、修業年限三箇年、授業時數一週二十二

時間乃至二十五時間で、聲樂部では修身、獨唱、合唱、ピアノ、

音樂通論、和聲論、樂式初歩、音樂史、國語、英語又は獨語及體操、器樂部では修身、器樂ピアノ、オルガン、ワイオリン、ギタ

樂通論、器樂合奏、和聲論、樂式初歩、音樂史、國語、英語又は獨語及體操を課する。

甲種師範科は、師範學校、中學校及高等女學校の音樂科教員を養成するのが目的であつて、修業年限は三箇年、授業時數は一週二

十時間乃至二十九時間で、修身、唱歌、器樂オルガン、ピアノ又は音樂通論、和聲論、音樂史、教育學、音樂教授法、國語及漢文英語、體操及遊戲を課する。

乙種師範科 一箇年間一週二十二時間づつ、修身、唱歌、オルガン、音樂通論、唱歌教授法、國語、體操及遊戲を課する。

豫科の學科目は修身、唱歌、器樂ピアノ、オルガン、音樂通論、國語、英語又は獨語及體操で、修業年限は一箇年、授業時間は一週

選科は一週二回乃至三回、生徒の便宜な時間に唱歌ピアノ、ワイオリン、オルガン、ギタロソチェルロ、箏等を教授する、修業年限は五年以内である。

入學の資格と試験 豫科は中學校第四學年又は高等女學校本科四學年を修了し、品行善良で、口頭試問及體格検査を受け、入學試験に合格した者。

本科は、豫科を卒業した者又は豫科入學の資格を具へ試験の上豫科卒業と同等以上の力があると認められた者。

甲種師範科は、師範學校、中學校又は修業年限四箇年以上の高等女學校本科を卒業し、品行善良、年齢滿十六年以上で、當該學校長の薦學を受け、入學試験と口頭試問及體格検査に合格した者。

乙種師範科は、高等小學校第二學年を修了した者又は之と同等以上の學力があると認むべき者で、品行善良入學試験と體格検査とに合格した者。

特別入學 前記の入學資格の無い者でも試験の上入學を許すことがある、但し此除外例は本校で音樂の天才と認められた者に限り且豫科は中學校又は高等女學校本科第四學年までに修める全科目、甲種師範科は中學校又は修業年限四箇年の高等女學校本科を卒業するまでに修める全科目の試験と有資格者と同じ試験科目の試験とに合格することを要する。

學年と學期 學年の始めは四月で、授業は第一學期四月十一日から七月十日まで、第二學期九月十一日から十二月二十四日まで、第三學期一月八日から三月中旬までである。

授業料 本科 年額金參拾圓、但し四月に金九圓、九月に金拾貳

圓、一月に金九圓宛分納

豫科 年額金貳拾五圓、但し四月に金七圓五拾錢、九月に金拾

圓、一月に金七圓五拾錢宛分納

選科 一科目年額金貳拾圓、二科目以上は一科目を加へる毎に金

拾五圓増、四月に十分の三、九月に十分の四、一月に十分の三の

割合で三回に分納

師範科 甲種乙種共授業料を納めるに及ばぬ。

受験料 豫科、本科、師範科、金貳圓

入學料 選科、金壹圓

卒業後の資格 甲種師範科の卒業生は無檢定で、音楽科中等教員免

許状を授けられ、又特別國語を修めて成績の優秀者は國語科の免

許状も授けられる。

本科卒業生も、教育學及音楽教授法を修了した者は無試験檢定

で、音楽科の中等教員免許状を授けられる。

乙種師範科卒業生は無試験檢定で小學校専科の正教員になれる。

甲種師範科卒業生服務規則 卒業後一年間は文部省指定の學校に奉

職し尙一年間引續き教育に従事する義務がある。

徴兵關係 師範學校或は中學校を卒業した者、又は滿二十二歳まで

に本校の本科或は甲種師範科を卒業して入營することの出来る者

は一年志願兵になれる。

本校の豫科、本科又は甲種師範科在學の男子は、一年志願をすれ

ば入營の延期を許される。

服裝 黒又は紺絨背廣形立襟の制服を著用し、海軍形黒絨制帽を用

ゐる。

女子 綿布、麻布又は毛織地の質素な衣類を著用する、但し羽織

は銘仙類を用ゐても差支ない、儀式又は演奏會出演の際には冬は

木綿黒五ツ絞付、夏は木綿縮鼠色五ツ絞付の式服を着ることに定

めてある、袴は常にお納戸色カシミア又はセルを用ゐる。

寄宿舎 甲種師範科、本科及豫科の女生徒で、父兄又は相當な保護

者の家から通學することの出来ない者の爲めに、本校の構内に寄

宿舎が設けてあつて、約八十人を收容する。

寄宿料は一箇月金壹圓五十錢、賄は寄宿生が女中を使つて自分で

する組織で、食費は只今では月額約拾參圓である。

大正九年度の募集人員

豫科 約三十五人(男女合計)

聲樂志望者 約十人

内 ピアノ志望者 約十五人

ワイオリン志望者 約十人

甲種師範科 約四十人

男子約十五人

内 女子約二十五人

乙種師範科 約二十人(男女合計)

大正九年度の入學試験日割

豫科 大正九年三月廿七日から

甲種師範科 同 三月二十九日から

乙種師範科 同 三月三十一日から

大正九年度の入學試験科目と程度

豫科

- 一 唱歌
簡易な旋律の書取、音階(長旋法)音程と歌曲(小學唱歌集中の歌曲と新曲)
- 二 普通樂譜
大要
ピアノ、ワイオリン又はオルガンの中一を選ばせて、基礎練習と簡易な樂曲を課する
- 三 器樂
中學校又は高等女學校本科第四學年修了の程度で
- 四 國語
英語、獨語又は佛語の中一を選ばせ中學校又は高等女學校本科第四學年修了の程度で
- 五 外國語
簡易な旋律の書取、音階(長旋法)音程と歌曲(小學唱歌集中の歌曲と新曲)

甲種師範科

- 一 唱歌
簡易な旋律の書取、音階(長旋法)音程と歌曲(小學唱歌集中の歌曲と新曲)
- 二 普通樂譜
大要
オルガン、ピアノ又はワイオリンの中一を選ばせて、基礎練習と簡易な樂曲を課する
- 三 器樂
中學校又は高等女學校本科第四學年修了の程度で
- 四 國語
中學校又は高等女學校本科第四學年修了の程度で

乙種師範科

- 一 唱歌
音階と小學唱歌集初編の歌曲
- 二 國語
高等小學第二學年修了程度で

出願手續 入學志願者 入學願書に履歷書、戶籍謄本(二ヶ月以内に作成したもの) 當該學校長の卒業又は修了證明書(最終學年の學業成績を記入したもの)と品行證明書、寫眞(手札形單獨半身

脱帽で二箇月以内に撮影したもの) 及受験料金■圓(現金でか又は郵便小爲替の拂渡局又は請取人を指定せぬもので)を添へて大正九年二月二十一日から二十八日までの間に差出すこと。
甲種師範科入學志願者は、(空白ママ)の書類の外に當該學校長の薦擧書を添へること。

乙種師範科及豫科入(學志願者)で、まだ師範學校、中學校又は高等女學校に在學中であつて卒業又は第四學年修了の資格の出來ない者でも、入學試験期日前に右の資格が出来る見込の者は當該學校長の證明書を添へて出せば願書を受付ける。尤も試験の日までに第四學年修了又は全科卒業の證明書を出さねばならぬ。

官公立學校在職者其他公職に在る者は、別に所轄廳の應募認可書を添へること。

入學願書と履歷書の書式

入學願

私儀御校何科に入學志願に付試験の上御許可被成下度別紙履歷書相添へ此段相願候也

本籍地 何々
現住所 何々
族籍 何某何男兄弟姉妹又は戸主
何 某印
何年何月何日生

受 驗 器 樂 何
受 驗 外 國 語 何語
年 月 日

東京音楽學校校長村上直次郎殿

履 歴 書

族 籍

何 某

何歳何ヶ月

出生地 何縣何郡何市町村

父兄職業 何々

何年何月何日何學校に入り何年何月何日卒業又は何學年修了

何年何月何日何某に就き何々修業

賞罰何々

右の通に有之候也

月 日

右

何 某㊦

〔音楽〕第十一卷第二号 大正九年二月 五五〜五八頁

樂界時報

東京音楽學校の入學試験 本年は試験規則改正の結果が豫科の志望者は昨年比して減少し、師範科の志望者は著しく増加して百十九名の多きを算するに至つたといふ、右は豫科の方に外國語が加つた爲ではあるまいかと思ふ。豫科志望者の方も本年から器樂が加はつたので、從來器樂は非常に出来ても歌の方がよくなかつた様な人達が此方に加はつたので、仲々器樂には堪能な生徒が見えた様

だ、高等女學校卒業の資格のない爲に豫備試験をうけた人達も二十四五名あつた様で、其中七名丈が残つたさうだ、甲種師範の方は豫備試験を二名うけて一名残つたとの事である、但し此人達の中何人丈が最後までこのこるかはまだ解らないが、皆さんの手に本誌の届く時分には無論判明する事でせう、唱歌の試験は小學唱歌中の『古戰場』であつたさうで、新曲の問題はかなりに難かしい者だつたといふ。年々入學志望者の技倆が高まつて来るから、試験が難しくなるのも當然で、これも樂界進歩の徴として喜ぶべき事である。

〔音楽界〕第二二三号 大正九年四月 二三頁

樂界時報

東京音楽學校 三月二十七日より入學試験を施行した同校では、四月七日其成績を發表したが、豫科に二十九名甲種師範科に三十六名、乙種師範科に十六名の入學を許した、豫科の方は試験の程度が高まつたので、例年に比すると其成績は好い方ではなかつたとの事である。

〔音楽界〕第二二三号 大正九年五月 二六頁

東京音楽學校生徒募集

東京音楽學校ニ於テ大正十年四月入學セシムヘキ豫科甲種師範科及乙種師範科生徒ヲ募集ス入學志願者要項左ノ如シ
一、入學願書受理期間大正十年二月一日ヨリ十日マテ
二、入學資格 豫科ニ入學セントスル者ハ中學校第四學年又ハ高等女學校本科第四學年ヲ修了シ品行方正身體健全ニシテ藝術家タル

二適當ノ者タルヘシ

但シ中學校又ハ商業女學校在學中ノ者ト雖當該學校長ニ於テ本校入學試驗期日以前ニ第四學年ヲ修了スヘシト認メタル者ハ修了者ニ準ス

甲種師範科ニ入學セントスル者ハ品行方正身體健全年齡滿十六年以上ニシテ左ノ學力ヲ有シ師範學校中學校高等女學校教員タルニ適當ノ者タルヘシ

師範學校中學校又ハ修業年限四箇年以上ノ高等女學校本科ヲ卒業シ當該學校長ノ薦舉ヲ受ケタル者但シ師範學校中學校又ハ高等女學校在學中ノ者ト雖モ當該學校長ニ於テ本校入學期日以前ニ卒業スヘシト認メタル者ハ卒業生ニ準ス

乙種師範科ニ入學セントスル者ハ修業年限二箇年以上ノ高等小學校ヲ卒業シ若クハ之ト同學以上ノ學力ヲ有シ品行方正身體健全ニシテ小學校教育タルニ適當ノ者タルヘシ

三、試驗科目

豫科

一、唱歌(簡單ナル旋律ノ書取、音階(長旋法)、音程及歌曲(小學唱歌集中ノ歌曲竝ニ新曲))

二、普通樂譜(大要)

三、器樂(「ピアノ」、**「ワイオリン」**又ハ**「オルガン」**ノ中一ヲ選擇セシメ基礎練習及簡易ナル樂曲ヲ課ス)

四、國語(中學校又ハ高等女學校本科第四學年修了ノ程度)

五、外國語(英語、獨語又ハ佛語ノ中希望ノ一二就キ中學校又ハ高等女學校本科第四學年修了程度ニ據ル)

甲種師範科

一、唱歌(簡易ナル旋律ノ書取、音階(長旋法)、音程及歌曲(小學唱歌集中ノ歌曲竝ニ新曲))

二、普通樂譜(大要)

三、器樂(「オルガン」「ピアノ」、又は「ワイオリン」ノ中一ヲ選擇セシメ基礎練習及簡易ナル樂曲ヲ課ス)

四、國語(中學校又ハ高等女學校本科第四學年修了ノ程度)

乙種師範科

一、唱歌(小學唱歌集初編ノ程度)

二、國語(高等小學校第二學年修了ノ程度)

四、募集人員

豫科約四十五人(男女合計) 內聲樂志望者約十五人、「ピアノ」志望者約二十人、「ワイオリン」志望者約十人

甲種師範科約四十人(內男子約十五人、女子約二十五人)

乙種師範科約二十人(男女合計)

五、體格檢査及入學試驗

本校ニ於テ左記日割ニ依リ施行ス

豫科 三月二十八日ヨリ約五日間

甲種師範科 同二十九日ヨリ約五日間

乙種師範科 同三十一日ヨリ約三日間

六、出願手續

(イ)入學願書ニハ履歷書、戶籍謄本(二箇月以内ニ作成シタルモノ)、當該學校長ノ證明シタル卒業又ハ修了證明書(最終學年ノ學業成績ヲ記入シタルモノ)竝ニ品行證明書、寫眞(手札形

單獨半身脱帽二箇月以内ニ撮影シタルモノ) 及受験料金貳圓ヲ添付スヘシ

(ロ) 受験料ハ現金又ハ郵便小爲替 (拂渡局及請取人ノ指定ナキモノ) ヲ以テ納付スヘシ但シ既納受験料ハ受験セサルモノ之ヲ返付セス

(ハ) 甲種師範科入學志望者ハ當該學校長ノ薦擧書ヲ差出スヘシ

(ニ) 師範學校中學校又ハ高等女學校在學中ノ者ニシテ當該學校長ニ於テ本校入學試験期日以前ニ卒業又ハ修了スヘシト認メタル者ハ其旨ノ證明書ヲ差出スヘシ但シ入學試験日以前ニ卒業又ハ修了證明書ヲ差出スヘキコトヲ要ス

(ホ) 官公立學校在職者其他公職ニ在ル者ハ入學願書ニ所轄廳ノ應募認可書ヲ添付スヘシ

〔音楽〕第十一卷第十二号 大正九年十二月 五三〜五四頁

音楽學校の實際と入學の準備

上野の森に志す友へ

上野にて □ ○ 子

(現在、上野の生徒である一人の女性の偽らない記事であります。事情により、匿名にしました。……………一記者)

学校の内部の様子が御解りになりたいんですつて。あまり問題が漠然としてゐてお答へするのに迷います。それに學校に對して餘り無茶も言へない立場なので一寸頭をおさへただけですけど御返事しない譯にもゆきませんから思ひついた儘を差支へない所を、正直に並べませうか。さあ何から——。

一體、人間と言ふものは、未知の世界に對して憧憬と希望を持ちたがるものらしいですね。それは、或人から見れば子供らしい事かも知れないが、一面から見れば随分と人間をよりよく生かして呉れる事です。唯其實現に出會した時の殆必然的の幻滅の上に再び、より高いそれを築く元氣と深い心があつたならば——所で音楽學校もその通則?の如く若い乙女達が外部から見た様な左様な、華やかな純眞さ、幸福さでのみ埋まつて居る事は有得ません。どうせ人間世界ですもの。罪惡も有れば不幸も在るのです。併し實社會を少しでも歩んで来た私共から見れば本當に美しい世界です。たとへ一時は吃驚させられる様な事が在つても、學友の多分は、よく理解したなら、本心は何處かに善なる質を持つてゐます。又、よく音楽學校は、華美だとか云々とかきゝますが、私には、決して左様は思はれません。ちつとも高襟ハイカラでも何でも無いんです。むしろ他の學校よりも眞面目であり純であるかも知れません。その研究の對象が音楽と言ふ藝術である丈に、何處か他よりも異つた目で見られてゐるのでせうが、其は、其他の事と混ぜられる可きではありません。勿論貴女は、あの私立・音楽學校の様にはでな氣分と混同してはいけません。年々數回の演奏會の時には平常よりは、氣を附けますけれど、何時もはそれは構はないのです。他の勉強に追はれてゐるので。それは、通學の人には、當らない事もありますけれど、寄宿の人等は質素と言ひ度ひのです。

教室では、先生も生徒も皆眞面目です。時々喜しくなつて涙ぐむ事があります。それは例外の二三人の在る事は、何處へ行つたつてまぬかれない事でせう。日常の一端を御解りになるために、次に二

三日の日記を記しませうか。

* * *

××日 めっきり寒くなった。六時に起きる事も憶勃だ。今日はピアノのある日。まだ満足には弾けて居ない事を思出して飛び起るお部屋の人々はまだ起きない。食事の鐘が鳴る迄英語を調べる。七時から練習に行く。暖房装置がしてあるので、今頃からの練習も困難は感じない。八時半まで、ぶつ通しで、練習する。もう此曲もお仕舞ひにしなければ……。五回目だもの。

八時半、鐘が鳴る。ピアノの教室に行く。十分位して先生が光來した。『お早う御座います』今日は少し御機嫌が悪いな。うっかり出来ないぞ。と突蹉に考へる。一番始が私。二度弾かされて新しい曲を戴く。気持ちのいゝ上り方でなかつたので、気が済まない。今度はモザートのソナタ。また四の指が思ふ様に動かないとは自分乍ら情けなくなる。次がTさんの番。『音が硬い。貴女の手は何故さう硬いんでせう』先生の御顔には一寸血が上る。次はSさん。『まだ此處と此處が變ですね。そして、もう少しよく練習してゐらつしやい』皆御尤もと聞いて出て行く。私はペタルの事を一寸御伺ひする。『そんなに音楽なんでものは數學の様にはゆきませんよ』と、先生は、おかし相にお笑ひになる。後でSさんが、『貴女はあんなに、先生に、よくお話しが出来ていゝわねえ』と言ふ。疑問は聞かねば承知の出来ない私だから仕方がない。

十時半まで暇、早速今度の曲に目を通す。六つかし相で、困つたが併しうれしい。

十時半から國語、T先生。痛快な先生だ。兼好法師も、此先生の

口の上つてはたまらない。時折私達には豫想の出来ない様な質問をされるので少々まごつく。併し、居眠りはできない。この時間は、何時も緊張してる。こんなのが『教授法がうまい』と言ふのだらう

十一時半から音楽史。すべて筆記。その間に質問事項を見付けるのは、一寸頭が勞れる。ギリシア、ローマの音楽は今日で済んだ。今度から、キリスト教樂だ。O先生の御聲は細いので何時も、一番前に出張つて筆記する。

十二時半食事。學校は、樂器が八釜しい、寄宿も落着かないので、Tさんと一諸に寛永寺に行く。石段に腰を下して、今日の英語を読む。

二時から英語。

三時から櫻木町へ買物に行く。お菓子を買つて歸る。五時夕食。練習する。八時から今日の音楽史の整理。十時就床。

××日 九時からピアノの稽古。エチュードが一つ通過した。十時半から唱歌。何時も感じる事乍ら、もつと、發聲法等個人的に指導して戴けないものか知ら。十一時半から音楽史。今日は、時節柄、レコードで第九シンフォニーをきく。午後管絃樂があるから今日はこれで授業は済んだ。中食後友達と一緒に高臺の方まで散歩する。きれいな自然だ。二時から奏樂堂で管絃樂と合唱をきく。演奏會が近づいた。皆の腕も冴えて來た。N先生はどうしてあんな美しい聲を御出しになるんだらう。あの何十分の一でもいゝ、愜しいな併しとにかく居乍らにして、美しい音楽をきける事丈でも幸福だと感謝する。明日は、英語と通論だけ。九時からは、お部屋の皆様と焼芋を食べ乍ら雑談。Tさんが言ふ、『今度は焼芋屋へは貴女が行

く番よ』就床後も色々な話——思想問題だの、藝術が云々だの——がそれから夫へと續いて、十二時を打つ廊下の時計をきいて。眠れないのは強ち今晚の紅茶のきゝ目許りでもなさうだ。

××日 六時目が醒める。寄宿はまだ静まつて居る。『今日は日曜日だ、皆まだ起きないんだもの、もう三十分程』一寸した惰け心を出してまた蒲團を被る。二度目に目を醒したのは大方七時頃。Yさんつたらまだグウ〜。朝の中練習にゆく。お部屋の掃除當番。おひる、妹から手紙が来た。だん〜離れて行く様で淋しい。だが自然だらう。とあきらめても見る。昨日の洗濯物を取入れる。空を、ふとも見た。美しい事。寄宿の庭にも紅葉が散る。二時から、友と、松坂屋に出掛ける。たまに外出すると、子供の様に嬉しい。夜の練習が済んで妹に返事を書く。胸に浮んだ歌二つ三つノートにかきつけて置く。机を並べて居るOさんが、また横から覗き込んで『やあ、詩人々々』なんて冷かす『えゝさうよ』とわざと済ましてやる。

* * *

大分長くなりましたね。書けばいくらでも書き度くなりますが、もう、この邊で左様ならませう。寒い時ですから喉を痛めない様にしてしつかり御勉強なさる事を祈つて居ります。すべての障碍を破つて、進みませう。信じた所に向つて——

なほ静岡市吳服町六八、成樂會から『東京音楽學校本年度入學試験問題全集號(附入學手續き及準備法其他)』と言ふ小さな雑誌が、定價十五錢で出てゐますから、取寄せて御らんすつたら御よろしいと存じます。

上野受験日誌

甲、師 C S 子

(これも現在に上野の甲種師範に學んでゐられる若い女性の日誌であります。CS子さんは師範學校を出られて、上野に入學されたのであります……………一記者)

二十七日。明日からいよく試験だ。別に自信もある譯ではないが、今となつては、唯『自己の全力を盡して天命を俟つ』と言ふ雄々しく、しほらしい氣にもなる。豫科の方は今日から始まつた。一諸に講習(音樂園)を受けた人の中三四人は、今朝早くから出掛けて行つた。全て、勇士を戰場に送りでもするやうな氣分で、門まで送る。私達も明日からと思ふ時、何とはなく高鳴る胸を、強ひて落着けて、靜かに少しづつ唱歌をしたり、オルガンを弾いたりして見る。中食迄には、今朝出た人が歸つて來た。今日は第一回の唱歌があつたのだ。皆で色々忙がしく尋ねる。聽音は八調四分ノ四、嬰へ音が一つ、新曲は、へ調四分ノ二、嬰が一つ、割に長かつたらしい。夕方は早く入浴して休む。明日は唱歌、『充分な睡眠』をとるために、校舎は何時も程に騒がしくない。然し、相當な練習は缺かさないでしておく。

二十八日。こゝから上野までは、一時間はかゝるので、早く目を醒す。五時半。何時もよりも丁寧に楊子を使つたり含嗽をしたりする。五六分の發聲練習に十分位の音程練習を靜かにして置く。七時半皆で一諸に出かける。豫科は今日は休み。今日は、私達が見送られて行く。H先生の『しつかりやつてゐらつしやい』との御言葉

を聞いた時、何とも知らず喉が熱くなるのを覺えた。自分を正直に眞面目に表はすより外には仕方がない。途中にある宮へお詣りする。御鈴を鳴らして禮拜した時身が引き締る様(な)氣がした。『唯我力のまゝを表はせしめ給へ』『叶はぬ時の神頼み』も其當人の心得如何に依つては、大きな力を授かるものだと思ふ。いよく學校へ來た。男や女や、澤山の同年輩の人がぞろ／＼集まつて來る。この中の大部分の誰かゞ落第するんだと思ふと、當しく篩にかけられた米の様な氣だが強ひて落着いて見る。九時の始まりの鐘が鳴つた。初聽音の試験。へ調四分ノ四、本位記號一つ。落着ゐてさへすれば六つかしい事でも何でもない。三回小節に分けて三度位づゝ彈いて戴けるから、その間に充分間違ひなく聽く事が出来る。勿論、使用の樂器はオルガン。此場合の記譜の方法を、豫め自分で一定の順序をたてゝ考へて置く事が必要である、例へば、最初に彈かれた時には、小點で音程のみ記し、その次に歷時を記し乍ら小節を切る。その次には、すべてに於て間違ひはないかを檢し最後に明瞭に、仕掲げるといふ風に。若し聽音に於て、唯漠然と聞いて書いたのなら普通の人には、それが虻蜂採らずに終るものである事は、たしかである。私の近所にも赤い頬邊をして、溜息をついて、其癖あはてゝる人があるのを見た。今度は唱歌の試験が始まる。奏樂堂で、皆待つてゐる。取り々々の話し聲が方々から聞える。小聲で、新曲練習をしてる人もある。併し此樂器なしで歌ふ事はいゝ結果を與へないと聞いてゐたので私は沈黙する。『一番、一番……』小使が五六人宛順番に呼びに來る。『五十番……』私にも廻つて來相だ。用意して來たリンゴを食べて含嗽をしておく。『七十番……』さ

あ！これから。廊下を曲つて二階を下りて突當りの控室でまた暫時まつ。時々『ドミソ……』などゝ聞えて來るが、何拍子だかも、どんな音程だかも解る筈がない。順番に土廊下を渡つて行くと、其處であの受験寫眞と比べられて通される。受験生の中に、代へ玉を使ふ方があるのを、懸念してださうな、またまつ。全で、關所だなど皆笑ふ。『さあ次』無言で少々振へ乍ら二階を上る。濟んだ人も無言で青くなり赤くなりして下りて來る。ドアを開けて、うやく／＼しく禮をしていよく試験場に入る決心はしてゐたものゝ動機(マキ)の早いこと。黒板にかいてある譜が舞踏してゐる様だ。『此處だぞ』と思つて大はな息を吸つて椅子に就く。試験官は五六人らしい。私はこのパートの最初だったので、一度オルガンでひかれるのをきく。ハ調四分ノ四、嬰音一、あまり六つかしくはない様だ。前に立つて黒板を見乍ら歌ふ。新曲の次は唱歌。第三編中の『秋草』が出た。かゝる場合の高慢しきは最も嫌惡されるものだ相だ。音聲は、心の表現である。學年の經驗を持つて居られる試験官には、受験生の音聲をきけば、その精神は、言葉を交したよりもよく解る様だ。も一つ唱歌の受験の時忘れ度くないのは、大きな吸氣を執る事と、最初の音を間違ひなくきゝ取る事。自分のが濟むと出てゆく。此時になると試験官の御顔を一寸拜見する事が出来る位に落着いてゐた。でも流石に顔は火照つてゐた。軽い安堵を覺えて歸途に着く。夕方、今日の結果は發表せられた。自分の番號が其中に見出された時本當に嬉しかつた。明日は國語。問題集等を見ておく。作文は多分は音樂に關する思想的な論文めいた物に違ひない。若しか、叙事、情文なら其時はうまく筆を廻す事も出来るが、こんな方面は一寸左様も行

かないので、床に入つて眠るまでの時間に音楽を中心にした思想を
總括しておく。

二十九日 今日豫科の人も一諸。八時始めだから昨日よりも急いで出掛ける。學校へ行つて見ると實に昨日の倍以上の人で埋れてゐる。八時の鐘が鳴るや、豫科は一回樂器。私達は國語の受験場へ行く。和歌二つ。詩の評譯一つ。其他に文章の語句の詳解一題。文法は活用五つ。作文題は『音樂の必要』最初に問題を見て考へた通り、二時間の時間が不足を告げる位の忙しさだつた。併し自分で出来る丈は書けたから愉快だ。

三十日。今日は器樂。私はオルガンだつたので、バッハのフーガの始め二頁をひいた。ペンダーや、教則本の人もある。ピアノではソナチネやソナタの様だつた。エチユードの人も多い。ピアノとオルガンは室も試験官も異ふ。随分落ちついたつもりだつたが、先生の前で弾くと上氣して、何時もの様にすらくと弾けなくて悲しかつた。受験場へ、オーバーを着て入つた人が注意をうけた。豫科は、今日は、國、英語、乙師は、午後一時から唱歌、歸りに出會つた。夕方昨日と今日の成績發表。充分元氣が出る。

一日。八時から九時半迄樂典。豫科も甲師も一諸。思案の外容易で、うれしかつた。九時半から豫科は口答試問。私達は二回の唱歌が始まる。新曲は、ハ調四分ノ四、嬰二つ。プレツスが六つかしかつた。乙師は十時から國語。

二日、八時から十時まで英語。英譯も和譯も兩方課された。十時から口答試問。問はれた事項に對してはきはきと答へればいゝのだ解り切つた事でも問はれて、まごまごする様だ。一寸した作法も心

得て置き度い。豫科も今日第二回器樂（唱歌）だ。器樂は自己が練習して來たもの。大低ソナタらしかつた。唱歌は、コンコネーの二十五番までの中、自分で一曲を選び持參して受験場で何番を唱ふと言つて歌ふのだ相だ。勿論この豫科の第二回の試験は本科でピアノをする人はピアノだけ、聲樂する人は聲樂だけ受ければいゝのである。乙師は八時から體格検査がある。

三日、今日一日、試験は休み。朝八時Tさんが慌しくかけ込んで來た。『發表になつたんだつて！』『おやさう』『私は？』『私は？』『……』皆の顔色は變はつて居る。『私のは？』『見なかつたの、私だけ見て飛んで歸つた』『まあ氣の利かない人』自分で行く事は恐ろしく恥ずかしくもあるので人を頼む。全く三年位は、命は縮まり相だ。頼んだ人が歸つて來た『どう？』『あなた大丈夫よ』『まあ嬉しい』『私は駄目』何と言つて慰め様。同じ様に、この寄宿から通つて來た人の中、迄漕ぎつけたのはSさんと私。自と浮び上る頬笑みを消す事が出来ない。百七十八中の今日残された人は、三十五六人、私の力では無く全く『幸福なる運命の力』で有つた様な氣がする。明日は體格検査だけ。もう充分に伸々した氣になる。まだ判然と解りもしないのに、御日出度うを浴せ掛けられる。まさか體格で除かれる心配は私にはないのだが。『もう入學を許可されたのも同じですよ』H先生もニコくして下さる。夜は今までの結果を故郷の人達に報ずる。併し電報で知らせる程熱心に氣遣つて呉れる者もなく、又私も有頂天にも成つて居なかつたので葉書にざつと書いて出す。

四日 清い着物に着更へて行く、昨日迄と異つて、何と言ふ愉快

な気分だ。總てのものが幸福で元氣だ。笑ひ度くてたまらない。的
 の顔が輝いて居る。體格検査は嚴重、特に喉や鼻等は注意された。
 私達三十人許りで學校はひっそりして居た。樂園に歸つたのは三時
 頃。發表の日まで、數日來の勞れを休み様思ひ切り遊び廻り度い。
 七日 朝になるのを待ち兼ねて發表を見に行く。有つた! 今日
 は、判然と姓名が書かれてある。もう他の物は何も要らないと思ふ
 程嬉しかつたのは言を俟たない。雨に櫻花が散る。此處が私の住み
 家になるのだ。夜八時楽しい愉快な勇ましい『數年來の收獲』をも
 つて故郷に向ふ。あの時は、かく反對した親達も喜んで呉れるに違
 ひない事を信じて……。東京驛頭、赫々と照る電燈も、私には今宵
 は永遠の希望を語る様にも、私の第二の生活の門出を祝つて呉れる
 様にも感じられた。

『月刊樂譜』第十四卷第一号 大正十四年一月 九〜二頁

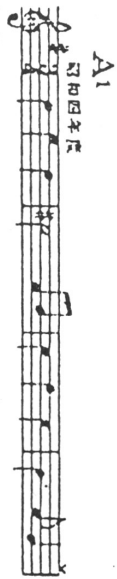
三 昭 和

(一) 入試問題

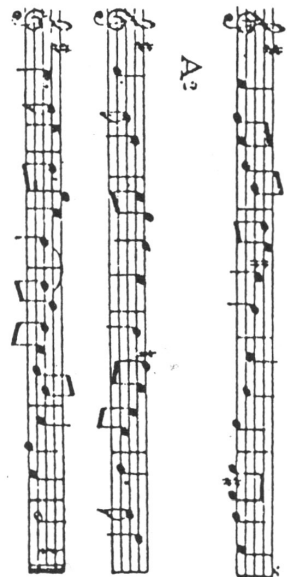
東京音樂學校入學試驗問題

昭和四年度

聽 音



新 曲



樂 典

(1) 和聲的短音階とは何ぞや、

(2) 一點ト音(G)の上に、總音程表

(半音階的音程を含む)を作り且つ其の各音程に名稱を附記し更に其の中より協和音程を抽出分類せよ。